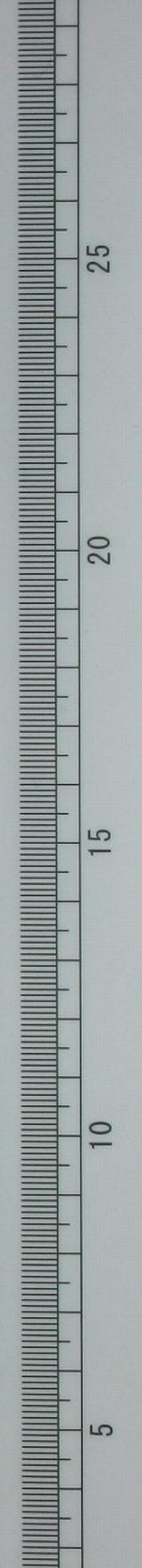




朝夷巡島記第八編 四



13
939
39



門 413
號 939
25

朝

朝夷巡島記全傳第八編卷之四

東都

松真十金水編次

天正十五年二月
花房仙次郎氏寄

續輯第十七

主と素ね化ぶ隠川の上
奸計一とび就る石戸の郷士

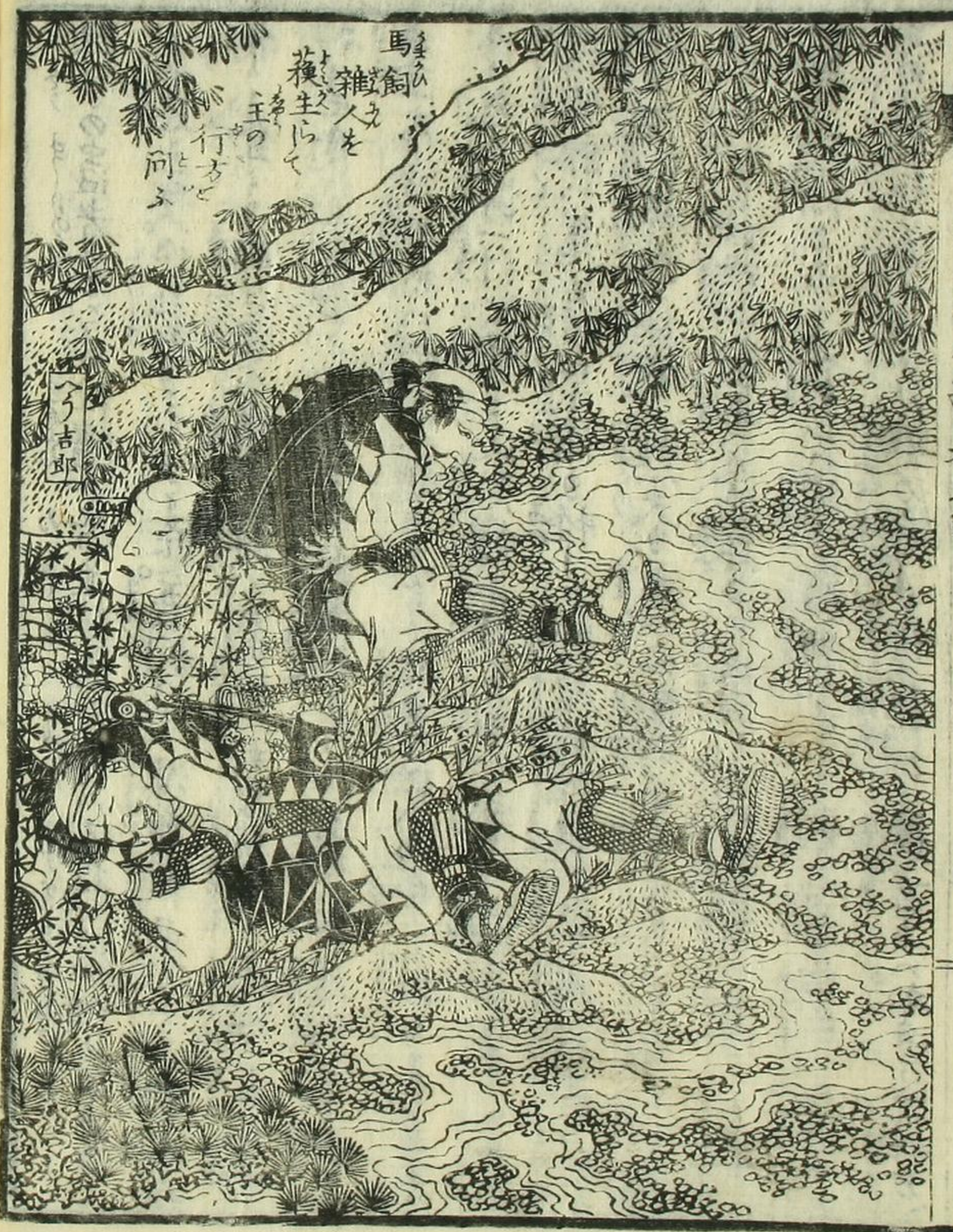
かくそその明の晨東雲の白むと俟て馬飼標吉郎嗣忠の駑馬を
秣飼ひ宮弘義と弘秋と俱に馬を乗せ行者が往方と素ねを促ける
宮小四郎弘義の老の身を符倉小疲まるとして起るは昨夜笹媛小
母の心むかへて心で慰むむ為のし既小雨風止と夜も明く人冠者の何れも
何れもかの林原小あえさ程も飯りあつて必せり小奴等もも疲きて熟睡
るる心も起るも便多た不為あまはるる要時猶倦せよと云ふる中
まごの子の董次秋弘も父が如きとまうする然もよふ心ごとくあつて

朝夷巡島記全傳

101

枕の掛けをどしと面蒼くも嗣忠のこころを父の日未あいに老実ある者なりと
 思ひつゝのちのちかゝ薄情なまのあつたり。集巻の尻も他人のまじり。又安南の
 この自辛は吾の渠を承けし子。して一騎被処の由。その安否を頼みし。昨日僅
 お残りのまじり告て宮の門あけり。乗せし。元末路の案内知らず。昨日僅
 おまじり心當不往。ふらふら幅三天をりの溝川へ。隠れ川。お波
 らんと岸をのりけ。昨夜の大雨。水高や。岸より。漲り流。し。船
 持。おまじり渡。を。さ。す。も。ろ。く。浅瀬。の。ま。ま。馬。を。ち。入。る。過。あ。る。胡。虜。の。持。と
 右やせん左やと川端と。けの戻りつ。踏踏。と。半响。おのありぬべ。か。る。処。不。重。次。秋。の
 馬。の。早。め。と。地。来。り。標。吉。と。ん。て。冷。笑。ひ。お。主。の。吾。們。と。実。多。る。者。と。思。ひ。こ。る。ま
 と。お。ま。じ。り。後。で。一。騎。純。然。と。小。奴。が。知。せ。し。ま。ら。ず。措。ま。ず。来。て。ま。ま。ば。川。渡
 さん。ま。ま。渡。さ。る。あ。の。笑。ぞ。か。か。る。家。の。と。遠。り。く。わ。ら。し。も。何。の。詮。あ。る。鈍。三

人やと嘲と。標吉。て。胸の裡。安。ら。ぬ。怒。り。の。舎。め。と。今。争。へ。と。時。節。に
 あ。ら。び。渠。の。按。内。も。よ。く。知。つ。ま。ら。ぬ。ま。ま。の。従。ひ。て。教。へ。と。面。赤。け。お。ま。じ。り。後。方。と。わ
 ら。し。と。肝。要。あ。ら。し。と。あ。ら。し。と。微。笑。て。彼。お。對。ひ。努。力。を。願。ふ。と。実。多。る。と。思。ひ。こ。る。ま
 あ。ら。び。ま。ま。己。が。為。め。主。君。あり。然。る。と。ま。ま。の。性。方。と。ま。ま。の。須。臾。の。安。ら。ぬ。後
 東。雲。を。も。む。と。俟。つ。け。出。ん。と。す。ま。ら。ず。疲。ま。さ。り。と。真。の。最。り。然。る。と。心。お。ま
 ま。ま。按。内。の。ま。ね。と。頼。性。て。委。ね。し。の。と。ま。ま。の。外。お。ま。の。川。の。漲。る。水。の。烈。さ
 に。心。臆。と。渡。り。も。や。ま。辛。く。果。て。い。と。愿。ひ。の。浅。瀬。と。教。へ。よ。と。艱。難。家。の。お
 秋。弘。誇。り。う。ふ。お。ん。と。如。く。の。川。の。細。塵。あ。ら。し。と。大。雨。の。後。の。十。方。の。水。聚。ま。ら。ぬ
 深。ま。ま。日。未。お。倍。し。は。や。船。あり。標。あり。も。輒。く。と。渡。さん。や。と。の。水。の。自。然。不
 落。ま。ま。俟。つ。り。他。の。ま。ま。あ。ら。び。者。共。此。処。不。准。備。せ。し。と。敷。て。頼。甜。め。吾。り。且。く
 休。息。せ。んと。従。者。お。ま。ま。と。薦。と。敷。せ。や。と。馬。より。下。り。ま。ま。と。優。ま。ま



馬飼 雑人を
獲主らて
主の
行方
問ふ

素行の具不認めりとも臣子者主親の性方なきぬとそのまふ
閣下のあるまじや。尚ら渉ふ世と遁まて。隠ま栖道人のありつゝと聞
さうし。同じも衆知むと答ふ。ふけりて馬飼の詮方そを狩者。送世
馬と準もふ牽せり。元来一方へ去る。あけり。深山川の落る。速き水
嵩の減。しりて。董次秋弘。彼処と渡り。ふ未。標吉郎。行達。ち
顛末。同。ら。標吉郎。心裡。不。渠。と。太。く。凍。め。も。い。て。果。て。と。あ。ね。
祠。多。小。雑。人。們。が。さ。る。ま。と。告。知。し。ま。る。左。小。右。小。宮。姓。と。高。後。り。計。ら
下。馬。と。早。め。て。と。ら。帰。る。雀。媛。の。宵。う。り。て。俟。焦。ま。る。良。人。の。身。の。上。今。日。の
と。明。時。今。不。於。て。標。吉。郎。音。信。あ。ま。の。刀。祢。の。由。不。過。あ。り。し。不。疑。ひ。は。倘
然。ら。ん。あ。の。後。の。誰。と。便。不。世。と。送。ら。ん。産。ま。て。い。ま。と。七。夜。ま。り。く。終。る
嬰兒。の。父。の。お。と。え。ち。ま。と。成。長。と。便。の。あ。り。し。如何。あ。ま。ら。び。初。禍。の。神。の。崇

う前世の罪を報いりてわだも。重抄の夏苦勞がら。端う。這回。の。符。お。か
立。あ。の。の。と。血。不。流。を。う。忌。わ。り。ひ。脱。不。初。止。め。り。も。止。り。が。た。武。夫。の。意。地。と。す
あ。心。不。の。あ。ぬ。殺。生。あ。り。報。い。と。も。い。を。え。不。圓。通。太。士。の。以。谷。里。沙
門。天。の。罰。あ。る。ん。が。る。季。文。月。と。こ。ん。り。も。彼。陸。奥。の。賊。寨。あ。り。命。と。捐。ま。せ
増。る。じ。と。過。去。未。来。種。々。と。思。ひ。廻。せ。ば。端。々。胸。の。と。痛。む。ん。地。を。物。ま。も
給。あ。へ。ん。の。の。の。と。老。実。不。煖。が。侍。と。難。ま。り。ぬ。芥。木。不。末。と。桑。の。の。浮
世。話。説。不。辯。と。せ。て。あ。ら。と。女。の。不。生。と。不。ど。果。敢。あ。り。ぬ。あ。ら。と。と。常
言。不。の。ひ。け。ま。と。と。ひ。返。せ。ば。然。ふ。あ。ら。と。女。子。の。五。障。三。後。の。滅。め。あ。り。と。い
い。ひ。あ。ら。と。忘。れ。さ。れ。ぬ。ま。と。女。子。あ。り。如。何。あ。ら。と。の。不。國。治。ま。る。と。平。の。世。不。あ。れ
男。不。倍。の。飲。樂。あ。り。元。より。深。き。意。不。潜。と。貴。と。人。の。行。さ。る。不。輕。羅。不。深。れ
褥。と。袈。ね。珍。膳。美。味。不。飽。満。て。或。ひ。好。る。絲。竹。や。香。排。香。茶。に。日。が

人の胸を逼りて田舎を果敢と去る爲に俯きをりて涙を
 涙と指りて拭ふるめ馬飼標吉の端々を歸り伴のほど河原を若
 狩者ガ遺書と披けぬ媛の一目をみるより手処平伏て声なき揚ぐ
 と泣く宮小四郎弘義夫婦のいし泣きも昇勢の中お弁木の空涙浦が
 如くお少を拭ひようめ狩を勧めを思ひかけぬ凶責の災難ありと
 えお女子心の誰とも今下さめと媛の青が狩お出せぬ箇才をのりおは
 と吾們と然とめんともまの道理深く言釈あり然ればお少志あり
 道人を救ひしとあるお聊心の易う必跡と尋ねると宜ふ仔細何
 めん吾儕つめ解がらめんお少のいふお少のいふお少のいふお少のいふ
 してありるが眼とつひとまを再びかの遺書と熟讀して妖怪お出念危ふと
 一道人が救ひし海で此の全ま限られたる運とお少のいふお少のいふお少のいふ

此後世間お少のいふお少のいふお少のいふお少のいふお少のいふ
 者ガ危急を扶くるお少のいふお少のいふお少のいふお少のいふお少のいふ
 何方へ伴ひて帰郷の期さるお少のいふお少のいふお少のいふお少のいふお少のいふ
 遺書の正ま狩者ガ自筆あり花押お少のいふお少のいふお少のいふお少のいふお少のいふ
 都ていふお少のいふお少のいふお少のいふお少のいふお少のいふお少のいふお少のいふお少のいふ
 公裁お少のいふお少のいふお少のいふお少のいふお少のいふお少のいふお少のいふお少のいふお少のいふ
 石戸の莊の若子の領地とある疑ひありお少のいふお少のいふお少のいふお少のいふお少のいふ
 後見あるお少のいふお少のいふお少のいふお少のいふお少のいふお少のいふお少のいふお少のいふお少のいふ
 お少のいふお少のいふお少のいふお少のいふお少のいふお少のいふお少のいふお少のいふお少のいふお少のいふ
 穢土の慣ひお少のいふお少のいふお少のいふお少のいふお少のいふお少のいふお少のいふお少のいふお少のいふ
 いらぬお少のいふお少のいふお少のいふお少のいふお少のいふお少のいふお少のいふお少のいふお少のいふお少のいふ

とあるも、まや、お言ひは貴人の非と論るべし、
終る夫も、道へおまゝ、異人おまゝ、危急と救ひ、
跡のよく計らふと、雑人們が存亡に愛り、
妻子のふ及む、媛の女性の、馬飼刀狩、
は、この、夫夫婦の間、お説くと、奈れ、
朝臣の、信夫の、赤心、要合、
奥必、艱難、辛苦、の、更、操、
ひ、所、あり、今、の、條、あり、明、地、
さ、生涯、配、逐、の、思、ひ、の、釋、あり、
捐、恩、受、の、切、り、の、孩、見、の、願、も、

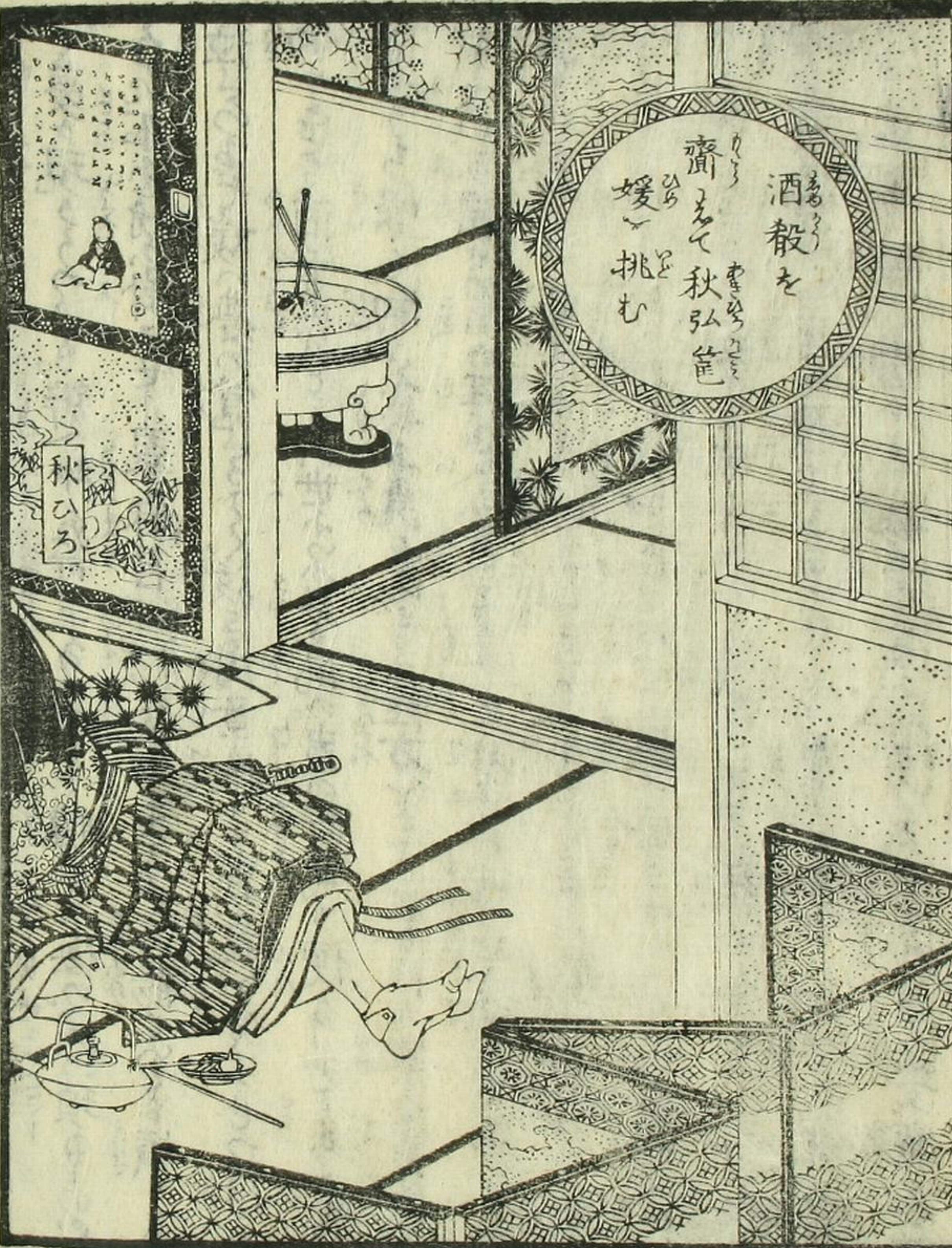
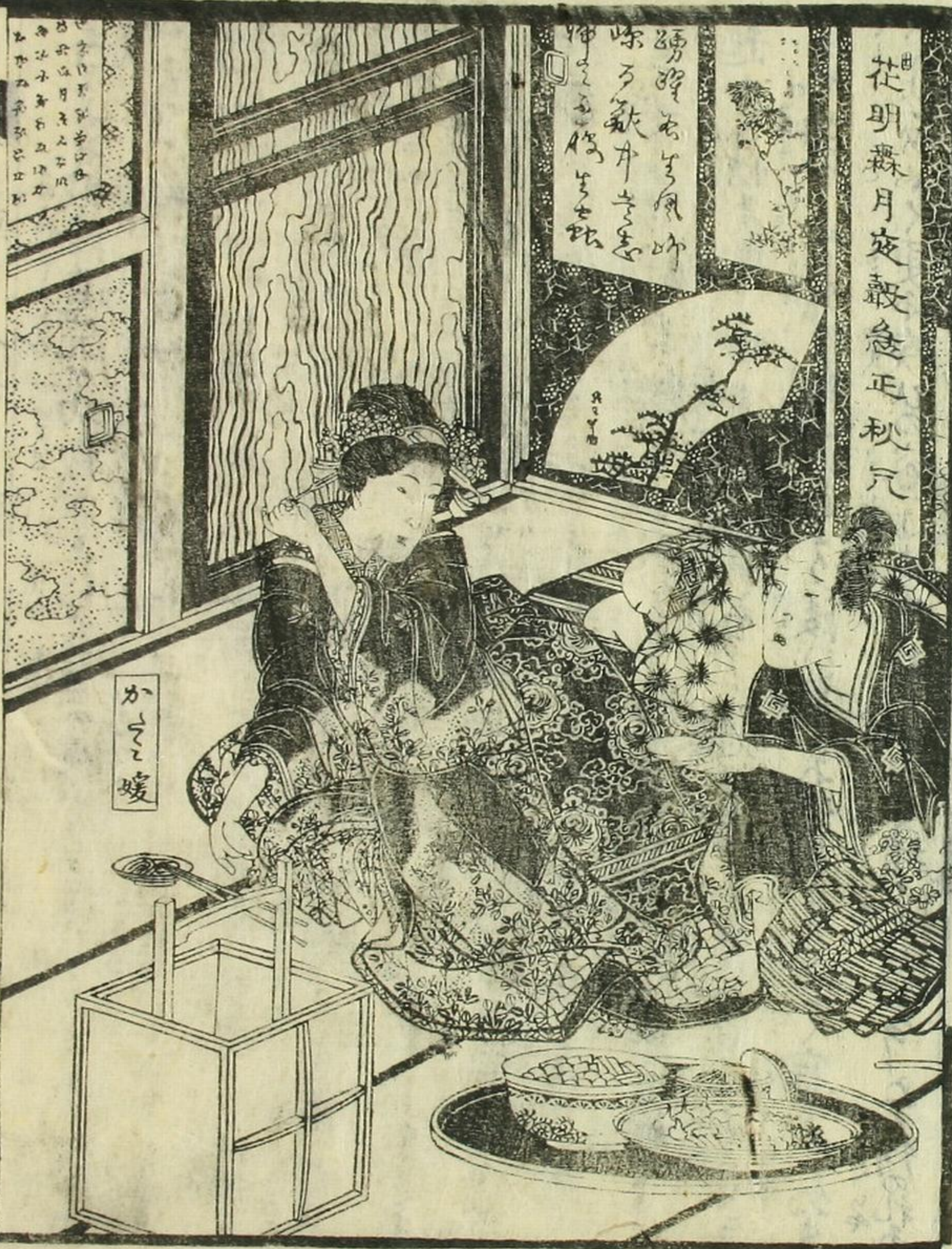
媛は、其の、心、お、合、と、あり、
眼の、堅、定、一、分、も、違、ふ、
いと、誇、り、の、言、ひ、
お、ひ、と、お、ま、
ぞ、私、語、比、翼、連、理、の、契、り、
の、浮、世、の、
中、の、か、ま、
あ、ま、
と、あ、
り、ま、
俱、お、媛、君、と、

謀ふいと易う。然る吉見が從臣多。江三二より如の悔り。九校あり。
 當時妻子の留ひ。越の園に赴き。歸り。少く程ある。その回。自衛。
 董次。渾家とある。渠が歸り。来る。あつ。後易う。人と思。援
 救。さす。迫り。い。も。夫。の。の。及。を。不。以。小。和。僧。が。法。力。を。是。と。由。小
 救。う。る。あ。あ。が。教。へ。て。よ。う。の。心。懷。か。探。り。紙。小。果。を。湯。の。の。い。え。も。お
 と。黄。白。の。重。も。多。寡。身。推。量。り。酷。残。の。額。を。按。て。重。れ。く。の。の。後。の。梓。小
 已。多。職。分。辱。と。推。頂。を。手。匣。の。裡。に。収。め。り。を。賢。息。と。媛。が。さ。い。い。と。易。茶
 似。と。い。ふ。男。女。の。情。態。権。を。て。自。由。を。祈。あ。り。況。や。の。頃。款。を。小
 沉。ん。て。肺。肝。さ。り。小。困。塞。ぬ。と。百。千。万。言。口。説。と。の。の。耳。小。入。る。今。子。洋。て
 挑。ま。い。返。あ。る。奇。特。で。り。て。あ。す。小。若。も。も。づ。且。く。俟。め。て。修。法。小。か。る。その

間。小。調。理。果。酒。般。酷。残。が。渾。家。持。出。て。珍。く。と。物。作。り。ね。と。遠。文。小
 勞。ま。の。ひ。ん。あ。ら。涉。り。の。不。自。由。さ。魚。川。般。射。小。斃。生。憎。る。頃。千。壽。川
 濁。り。て。鯉。の。と。ま。ぬ。ら。の。自。由。あ。り。あ。生。為。の。饅。茹。皮。剥。鯉。の。吸。物。の。味。は。は。と
 り。人。あり。殊。小。吾。儕。が。在。丁。の。山。陰。の。ぬ。り。の。豆。腐。肉。の。細。く。切。得。ぬ。を。拵
 こ。料。理。の。話。柄。苦。く。ず。の。郎。酒。一。献。酌。を。命。と。並。ま。す。小。四。郎。い。ひ。も。う。ぬ
 心。配。い。小。腹。の。加。減。を。志。と。受。け。ん。と。盡。把。て。傾。く。渾。家。の。後。追。從。の。例
 小。花。と。な。ぎ。う。せ。て。酌。つ。酬。つ。す。る。小。と。小。修。道。院。酷。残。の。間。小。入。り。て。交。う。う。と
 平。形。金。珠。と。押。揉。く。振。鈴。の。音。い。と。凄。く。片。時。終。り。念。ト。畢。り。頓。て。衣。服。と
 更。め。て。の。所。へ。出。ま。り。刀。拵。快。く。傾。け。の。り。さ。と。の。秘。券。の。男。女。愛。敬。の。一。の
 守。護。の。賢。息。の。肌。小。著。け。今。一。府。の。婦。人。の。国。の。天。井。小。貼。り。を。食。る。時。の。自。由。と。相
 合。の。檢。頭。の。人。と。白。木。の。折。敷。小。載。て。出。小。四。郎。把。て。お。戴。と。這。い。守。也。その

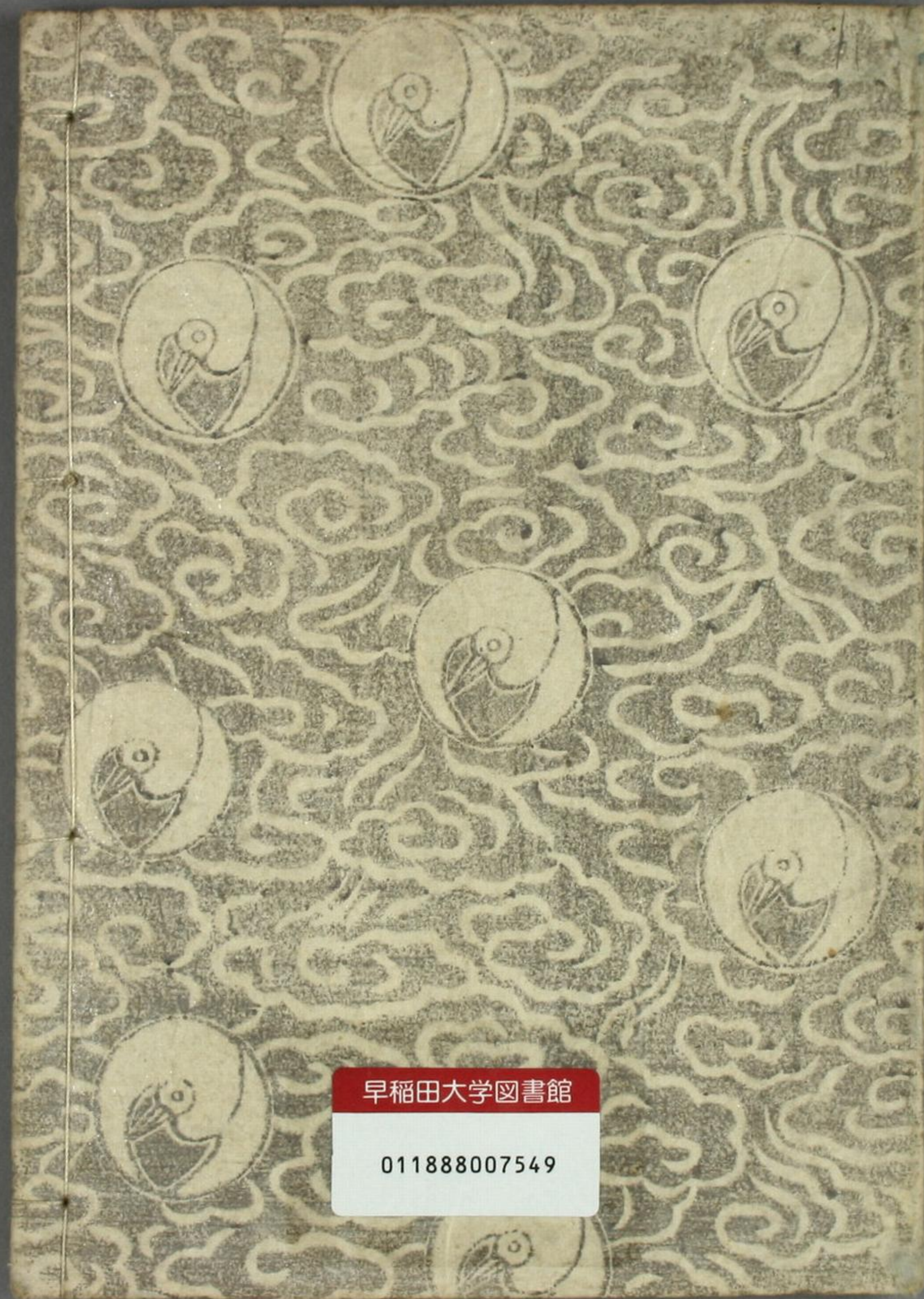
誠不似王の男と存まうその甲斐不かる處女と諸俱不明一暮六世間絶て
 望まぬあざむくなどと思へども他妻のいふももき詮方あること知れぬ心は
 乾かぬ袖の露思ひに憔悴ぬ病細る此の切なき誰に借らんや
 あく繁きとらぬ玉緒の早くとえ下さるく世にあつ程の恨めく秋三
 玉不計もか成りいとも不と思ふ名ひの物心へまほや未ぬるこそ愛人の
 歎きと此の悦びあるすの鳥游る所為とも咎めあつた心愛りて捨
 てる人と慕ふの思ひさささ拾へる赤心も競へていりまは誠あるおまの
 縁で肥ふ初ま重次が歌道媛いともあつたこととまへ耳の汚やく版下との
 思へどもこま下り後へ何小著向ひ高深ゆまら此あり一言小辱志あり
 還つて後の妨とありりやせんともあつた怒まて笑ひ小紛らして酒が過つ
 戯まると宜よといふも好者小捨らまてとるくあはれ此の沖の船風の隨ふ

流とあつ浮き牙ありあつたいま定ふ此の暇縁と断つといふ
 小ものぞ開く免早く異人小此と任するその後小元の夫の帰りま何と
 言釈怖あつたと思へば親心小いそと和殿が赤心推しあつた速に應と
 いふとぬ夫婦の義理の後の良人なり此の暇が小給さつた然まて小宜よ
 和殿が心と争慰めざるをまづ夫まの互の胸小収めて正志あつた若
 岐秋多小初さうち和らけてあつた重次の媛顔うち瞻望然と三
 今さう不返と初あつたを再びる世小出ぬとあつた遠き書めくまの縁
 こと限りといふをともあつたさうちさうち左右小以賜之三年三月俟とて別小
 離縁の証文来るま下さささ初りつたか宜よの情なり楊貴妃樓の嬌嬌る
 と深山松のむつけさ似合ぬと一筋小あつためりか怒りも屑あつた雄子
 の端らと移りい出つて美しとまの生涯世間の胡虜死ぬま雪むる淋あつた



まゝること彼修道院が功勳あるを以て翌の夜不あるとも。本々で遂人の掌の
中よありと歎びて母斧木よも如此このよと粗りのごまきば斧木のむこうも斧
親の身とて子よ不義と教ふる畧異みのあまど。そまて首尾よく仕裸せ
るべおん身が日來心とくひて暮ふ怨ひの夫のこころ。石戸の莊の幸の人の名は榊見
ふありるぞ。海と川ともまて著ぬ水の泡ある場子のこ後見するあま
若榊見不緯あつた。この莊園のあま身が東西久そく沉む家の名と興すもま
此一挙よあり。馬飼をどの帰らぬ前よ討らぬまて妨あらんえ得ぬと諭す
まを董次の点取うち歎び翌の夜とそ待よなまは筈媛のその明の日例のどく
起きて侍不臥と婢女不昨夜の若子ご思ひのよめ忠告あてあそ方立ち
まを噪ぐるるの毒さあまより後の常よ不交まてあくよく寐て今おの
よよのめく更不疾ひの容子もあわね。漸く安堵のよひとあぬ。この礼の

婢女も俱よ安堵のよひと。庵溜の方へ死てあかて朝餉も果し
緯よ紛まて日中も過ぎ。媛の孰かりへ。後で董次が折ふれ心
あり。この奉勅の此方もそと推し。今よあまは館の修理終るまて
の仮寓居。そと暮悒とあり。また程よ今教て心よ浪のさあや。あまそと
善まて縁柄をよとく風ふらち靡く。風情のよとて道まて不憶と出来たり。
彼へ徒らや徒らぬや。任え移りて住とも。董次父子がよい放さば。かていの上
その責もいよ烈まてありぬ。既よ昨夜のちつけお挑まて。方の悔まて
禱まて。この榊見ごあまはあま。一言よ辱まて。再びおとせぬまて。あま
術まて。知りるあま。腹まて。後との障りまて。人榊見の爲あま。あま
あま。詞よ和め種と。一寸道との口夜と。後まて。戯淫と。その奉勅。
心憎くも腹まて。御除んとせよ。あま。え瘥て心も彷彿と。五口よあま。あま



早稲田大学図書館

011888007549